

有限会社 ティ・ティ・エム

ものづくり技術

小規模型

高品質・多品種・小ロットへの迅速な対応を実現 世界に「Made in 高野口」の普及を目指す

事業内容 特殊織物製法(再織)を活用 ハンカチなどの身の回り品を製造

1997年(平成9年)に、オーヤパイル(株)、野上織物(株)、杉村繊維工業(株)などの企業によって、再織(さいおり)(生地に裏表がない織り方)と呼ばれる特殊織物製法での生産と、新分野や新用途、新商品の開発販売を目的として設立された。

具体的な製品としては、ハンカチが主力製品となっており、2000枚程度を最低ロットとして受注している。そのほか、バッグやポーチといったカバン類、スリッパなどを製造しており、製品ラインナップは多岐に渡る。受注形態としては、得意先のブランド名で製品を製造するOEM生産が主

流となっている。そのため、要望を的確に捉え、製品として仕上げていくだけの力量が必要となる。また、流通経路としては、縫製工場(問屋)を経由し、都市部の百貨店に流通しており、長年に渡って定評を得ている製品もある。

同社の技術的な特色としては、量産品の製造に重点を置くのではなく、手間がかかって量産が難しい製品の製造に注力している。特に主力製品であるハンカチに関しては、糸の選定を工夫することにより、ほどよい柔らかさの生地

ることも鑑みれば、この点の改善は欠かせなかった。

そこで、今回の補助事業では、原画(製品イメージ)から生産機用制御データ作成・シミュレーション・商品イメージ画像の作成が可能なデザインシステムを新たに導入した。



▲デザインシステム用パソコン

補助事業 経費削減と製品化までの時間短縮を図るため デザインシステムを導入

同社が製造しているハンカチをはじめとする製品の特徴として、高品質・多品種・小ロットであることが挙げられる。高品質・多品種・小ロットである仕事をこなしていく中で、デザイン(図案)をドット図案(織物用の図案)に修正する工程に多くの時間を割いていた。そのため、この修正工程にコストがかかり、生産量を増やせない原因ともなっていた。

また、得意先との打ち合わせにおいても、製品イメージ(要望)を受けてから、仕上がりイメージを作り上げるのに一定の時間が必要であった。そのため、得意先に待ってもらわなければならない、デザインに修正が加わる際はさらに時間を取られてしまう。これでは、納期面で満足してもらうことは難しい。近年、商品のライフサイクルが短くなってい

有限会社 ティ・ティ・エム

代表取締役 大家 健司
〒649-7205 橋本市高野口町名倉1067
TEL: 0736-42-3113
FAX: 0736-42-2054

(業種)綿製品製造
(設立)2007年5月
(資本金)3,000千円
(従業員)9人

成果

ボトルネック工程の解消 製品化までの時間短縮を可能に

新たなデザインシステムの導入後は、得意先から持ち込まれる完成品のイメージ(要望)をもとに、すぐに仕上がりイメージを提示できるようになった。消費者の感性に働きかけるような色・柄・商品イメージ等を迅速に製品開発することができるようになったため、従来よりも一歩踏み込んだ製品づくりを得意先と共同でできている。

現状としては、従来は1名体制でサンプルイメージの作成および再織風データなどを作成していたが、デザインシステム導入後は、新たに3名の研修を行い、導入機器を使いこなせるようにしている。ボトルネックになっていた修正工程を複数人で手分けし、短時間でこなせるようになったことでコスト低減にもつながっている。

一方で、デザインシステムの導入から1年あまりが経つ

が、デザインシステムの機能全てを使いこなさずにはいないようである。今後は、部分的に使うだけでなく、それぞれのケースに適した使い方ができるように、新技術の習得にも励んでいく。



▲デザインシステム画面

今後の展開

自社オリジナル品も模索 アパレルメーカーから新たな引き合い

これまで同社が手掛けてきた製品は、先行して出されているデザイン(柄)を後追いするものであり、特段に独自性のあるデザインを提示できているというわけではなかった。ただ、今回の補助事業で導入した新システムにより、デザイン(柄)を同社から提案していけるだけの基礎を整えることはできた。今後の展開としては、少し時間はかかるかもしれないが、技術力を高め、自社オリジナルの製品も発表していきたいと考えている。

最近の動向としては、従来はハンカチやバッグといった身の回り品を請け負うことが多かったが、高級アパレルメーカーからコートやジャンパーといった衣料品の引き合いを得ることも増えてきている。今回の新システムを活用しながら付加価値の高い製品づくりに努めていきたいとしている。

高野口の伝統的な技術の一つである再織と新システムを融合させることで、安価な海外製品との差別化を図り、「Made in 高野口」の普及を狙う。



▲上げ織にかかっている再織生地



▲再織織り上がり生地